関西大学での36年

野　浪　嗣　生

関西大学に奉職して早くも36年が経とうとしている。つい先日奉職したような感覚があるのにいつの間にこんなに経ってしまったのか。歳月人を待たずという言葉があるとはいえ、あまりにも月並みな表現で恐縮だが年月の過ぎ去る速さに今更ながら驚きの念を禁じ得ないでいる。着任以来、生来不器用であるからして次々に目の前に現出する出来事や事項に追われて慌てふためきながらもなんとか凌いできたが、ふと気がついて顔を上げると36年が経っていた、というのが今の実感である。

しかしこれまでの人生の半分以上を関西大学で過ごしてきたわけであるので、あらためて振り返ってみればやはりそれなりの記憶に残る出来事が存在する。例えば学生諸君たちとは授業での思い出よりも、宿泊セミナーやゼミ合宿でのほうに強い印象が残っている。夕食時には様々な話題をお互いにざっくばらんに、時には夜を徹して話し合ったものだった。学生たちの印象は授業の時とまた違って、彼らの新しい面、意外な面が見られて頼もしく思ったことも再々であった。学生たちからも何度か、先生の意外な一面を見られて楽しかったです、またやりましょう、という言葉をもらったことは嬉しい思い出のひとつである。

また同僚の先生方（この中には恩師の先生方、先輩の方々もおられた）にはお酒をたしなまれる方が多くおられ、会議などのあとには一種の慰労会として居酒屋へといざなっていただき居酒屋での振る舞い方を身をもって教えていただいただけでなく、わたしを除いて皆さんは談論風発尽きることがなく、そばで聞かせていただいたそのお話から触発されたこと一度や二度にとどまらない。大いに感謝している次第である。

ところで大学は1991年の大学設置基準の大綱化以来変貌に変貌を遂げてきて、未だに変貌を遂げつつある状況にある。関西大学ももちろん例

外ではなく、かつては６学部だったのが現在13学部と倍増し、文学部も従来８学科だったものが学科の名称を専修と変えその数も19と増大した。わが学科も設立以来のフランス文学科という名称からいくつかの変遷を経て、現在はフランス学専修という名称へと変化をとげた。それに伴いカリキュラムもまた当然のごとくに変わってきた。万物は流転するとの言葉通りこれからもまだまだ変化する可能性は大いにあり得ることだが、いかように変遷を遂げようとも36年間在籍しお世話になった者としては関西大学の、そして大恩ある文学部総合人文学科フランス学専修の今後の隆盛を希望し、また切に祈念していることを述べてこの小文を終えたいと思う。